



「熱い心」

～一人も取りこぼさない

「日本一熱く、絆強い学校」への挑戦～

「なぜ掃除をするのか」を考えてみよう！

…「なぜ『そうじ』をすると人生が変わるのか？」は、山本圭介という青年が、苦手だったそうじをするようになって彼自身が成長していく実話に基づいた小説である。…

圭介が責任を任されていた部署の作業場はいつも散らかっていて、それをしょっちゅう社長から注意されていた。ある日、圭介は入社する途中、公園で一人の老人がゴミ拾いをしている光景に違和感を感じて目が留まる。その老人が外国製のスーツをパリッと着こなしていたからだ。翌日、圭介は老人に声をかける。「地域のボランティアのように見えませんが、なぜ毎日ゴミ拾いをしているんですか？」老人の答えは、「掃除をすると得をする」だった。「どんな得ですか？」とさらに突っ込みを入れると、老人はただ一言、「ゴミを拾った人だけがわかること」と言うだけ。そこから圭介と老人との師弟関係のような交流が始まっていく。

あるとき老人は圭介にこんな話をした。「ゴミを一つ捨てる大切な何かを一つ捨てている。ゴミを一つ拾うと大切な何かを一つ拾っている」

そんな言葉に刺激されて、圭介は会社のそうじをするようになった。最初は一人でやっていたが、だんだん他の社員たちもつられてそうじするようになった。そのうち「そうじをしてキレイな一日を過ごしてしまうと、そうじをしないでいるのが気持ち悪い」と感じるようになった。

ある日、会社で使うコピーの量や、毎月買っていたゴミ袋が半減したことに気づいた。「最初はただそうじをしていただけなのに…」

そうじが習慣になると、汚れているところに気づくようになる。その「気づき」は日頃の仕事にも生かされてきた。お客様に気配りができるようになり、社員一人ひとりがいい仕事をするようになった。結果的に業績が上がった。

(中略)…「ゴミを拾う」。「人の役に立つことを、誰も見ていなくても勇気を持って恥ずかしがらずに堂々と行動に移す。自分の意思を貫く。ゴミ拾いが習慣づくことによって自尊心が芽生え、自分に自信が持て、何でもやってみようとして挑戦できるようになりますよ」…

やっぱり、汚れているところをキレイにする行為には、ただのそうじで終わらない何かがあるようだ。
～みやざき中央新聞社説より～

掃除を一生懸命やれるようになると、自分はどんな風になら変わるのだろうか？掃除を一生懸命やれるようになると、この学校はどんな風になら変わっているのだろうか？みんなはどんな学校をつかっていきたいだろうか？「なぜ、何の(誰の)ためにやるのか」を常に考えよう！一人一人の思いが学校をつくる！

見守られているあたたかさを背中を感じながら！

20年以上前に卒業した先輩の親御さんおやごから、今年も手作りの雑巾ぞうきんを贈っていただきました。先輩は、この稲葉学園で学び、壁を乗り越えながら成長していき、現在は社会の中で生き生きと働き頑張っているそうです。そんなわが子の人生の大きな変わり目となった稲葉学園に対する感謝と応援の熱い思いがこめられた雑巾です。大切に使うのはもちろん、一生懸命に掃除で汗を流すことを通して一人一人が自分を磨いていこう。やっぱり掃除の時間が一番「ずるさ」や「心の弱さ」があらわれるからね。自分の心と向き合いながら、掃除に一生懸命汗を流す姿で、大切な贈り物に対する我々の感謝の思いを届けよう。そして、こんなふうにいろいろな人から見守られているんだというあたたかさを背中を感じながら、この学校をもっともっと「ぬくもりのある学校」にしていこう。

